



片田正人

雲根誌という書が出た。私自身 名前のごくかすかにしか聞いていなかったし 内容はまったく知らなかった。が一読するにおよび深い興味を覚え あまねく紹介したい衝動にかられた。

このような著作が 今まで あまり人目にふれることなしにいたのは まったく不可解なことで 言を銜えば 我国の地質学などの根の浅さを感じる。 限定版で少々値の張るのが残念であるが 岩石や古墳に目を向けている研究者や趣味の人々にとっては 一読必見の価値はあろう。 この著作は本来 江戸時代後期に出版されたもので かなり読みにくいものである。 しかし今回 今井功氏によって 読みやすく(といっても古風な文語文で) 書き改められ 豊富な注と詳細な解説によって 私たちの身近に持って来ることが出来た。

解説によると 著者木内石亭は 一七二四年近江国の名家に生まれ 一生金銭の苦勞を知ることなく 「十一才にして初めて奇石を愛し 今に三〇年来 昼夜これをもてあそびて」暮した人らしい。

雲根誌とは「石誌」というほどの意味で 全三巻に分かれている(今回は一括)。そして石は以下のように分類・列挙されている。もとより 現代の知識からすれば 分類にも記述にも 荒唐無稽な部分が少なくないけれども それだけで この書を評価してはならない。

- 靈異類：言い伝えのある石
- 採用類：鉱物類
- 変化類：動植物に形の似た(それらから変化した)石で 化石もこの一種
- 奇怪類：奇石・珍石類で 言い伝えにまつわるものが多い
- 愛玩類：盆石・庭石など
- 光彩類：鉱物・貴石など
- 生動類：動く石で 動物に關した伝承的要素の強いもの
- 像形類：生物・無生物に形の似ているもの
- 鑑刻類：石器・矢じりなど
- 寵愛類：有名人や寺社などで愛蔵されたもの

以上各章に盛られた項目は 全部で六〇〇以上に達し 一項に石一種の 産地・性状・由来などが記述されている。 各項の長さは一頁に達しない程度である。

この書の内容に対しては いくつかの面から 価値や興味を強調することが出来よう。 その第一はまぎれもなく 岩石学・鉱物学・考古学の古典としての価値である。 この点は 学問的な系統からすれば「本草綱目」の流れに沿うもので 当時目新しかった蘭学の影響も認められる。 たとえば「採用・光彩・鑑刻」の章では 記述が客観的で 現代鉱物学などに直接通ずる 自然科学の萌芽を見ることが出来る。 鉱物名などには現在と同じ名称も多い。 解説でも強調されているように 私たちの国土から生じたこの科学の芽が 伸びることなく 枯れてしまったのは この上ない痛根事であった。 江戸時代の他の多くの科学的業績と同じ運命をたどってしまったのである。

第二に興味をそそる点は 隨筆風の説話的要素である。たとえば 徒然草の 榎の木の僧正や猫またの話のような 軽妙な話題もあり 古く日本靈異記に發した民間伝承や説話の類が 数多く語られている。 たとえば「靈異・奇怪・生動」各章の多くがそうである。

この第2の点は 石亭自身の(科学的)記録というよりも むしろ 人に読まれることを主眼とした記事かも知れない。 雲根誌と同じ頃 「耳袋」という書が世に出ている。 この書中には 当時巷間にただよっていた 噂話・逸話・言い伝え・記録などが あまり主観を交えず 手短かに多数盛込まれている。 耳袋は 現代風と言えばベストセラーだったらしいが 雲根誌の出版もあるいは広く知識人社交界に流布されることを大いな目的としたのではあるまいか。 この両書は 短い話題の集録という点で 全体の構成がよく似ているし ほとんど同じ話も出て来る。 こういった「話題集」は 当時の都市知識人間の流行書だったらしい。

最後に蛇足を加えるならば 時代が下り 地質学としてもう少し本格的なものに 志賀重昂の「日本風景論」がある。 文学と地質学の間中間的な著書であるが 雲根誌と同じく 日本の自然から自ら生じた知識である。 しかし明治以後の学界は 欧米の知識を直輸入するのに急で 雲根誌も風景論も 現代日本の地質学などとは断絶した はるかな古典になってしまった。

(筆者は 地質部)

木内石亭著 今井功訳注解説 目次と本文：1~526頁
 築地書館刊 丸善発売 解説とあとがき：527~582頁
 限定版 定価6,000円 参考文献と索引：584~607頁
 大きさ：18.5×12.5×5.5cm
 目次と本文：1~526頁